

ても、これは甚だ遺憾な一事である。故に筆を執る。

筆者は美術にも美術界にも全くの門外漢であつて、新任諸教授の氏名はともかく略歴の如きは新聞で始めて承知した程度であるが、問題の院展派の人々が歐風化する美術學校を去つた岡倉天心が明治三十年かに創設した日本美術院に育まれたこと、及び昔風の言はば徒弟的修業で今日の大を成したことを想ひ、甚だ愉快であつた。

明治初期の烈しい歐化時代に歐洲諸國の美術を調査して歸つた天心居士が、その巡歴によつて東洋の美術に對する傾倒の情を一層盛んにし、遂に『アジアは一なり』の見識に達したことは、最近數年來改めて高く評價される事實であるが、此の人の播いた種が昭和の聖代しかも大東亞戰爭の眞最中に其の所を得た事は天心にとつては蓋し快心の極であらう。況やその遺愛の弟子達が老來尙ほ青年の純情を以て、天心先生の追憶を語りなつかしむに於てをやである。之を綜合して一の國家的美談となし得ようと筆者は信ずる。而も此の美談が何等の作爲なく、たゞ斯界第一流の人士を集めようとの上野直昭校長の純粹な努力によつて、期せずして顯はれたのだから愉快である。

今日の教育刷新の方向は、身心一如とか學行一致とか云へば物々しいが要するに教育の原理が生活を貫くことである。師弟同行と言ふのは師弟の親密さである。陣頭指揮と云ふのは師が高邁なる抱負を掲げ之に精進する事である。この點で昔の家塾的徒弟的修業が近來の學校の斷片的教育に優ると云ふのが、昭和の時代人の反省である。然るに新任諸教授の人となりと苦闘の歴史は之に

對して貴重な例を提供してくれた。日本美術の健在は同時に日本教育の健在の證である。私は世人が斯る面に注目して、現在のみならず將來の教育を論じて貰ひたいと思ふ者である（東京美術學校教授）

〔現代〕第二十五卷七号。昭和十九年七月）

⑬ 上野直昭校長

校長に選ばれた上野直昭は、明治十五年十一月十一日兵庫県に生まれ、東京正則中学校、第一高等学校を経て明治四十一年東京帝国大学文科大学哲学科（心理学専攻）を卒業。同四十四年から大正十年まで美学研究室の副手をつとめ、その間、教授大塚保治、講師中川忠順の薫陶を受けて美学・美術史学者としての基礎を作つた。大正九年四月以降、東京女子大学講師をつとめ、同十三年十月には京城帝国大学予科講師となつたが、同月、美学・美術史研究のため滿二年間ドイツ、イタリヤ、ギリシャ、アメリカ合衆国在留を命ぜられ、翌十一月出發。昭和二年三月帰国し、京城帝大教授（大正十五年四月任命）として美学美術史第一講座を担当し、同十六年一月まで在職した。その間、五年二月から六年七月まで交換教授としてドイツに赴き、ベルリン大学で日本美術史を講じ、七年五月から十年四月までは九州帝国大学教授を兼任して法文学部美学美術史講座を担当。十年五月から十二年八月までは京城帝大法文学部長をつとめ、十五年十二月国宝保存会委員となつた。十六年二月大阪市立美術館長に就任、十九年五月本校校長に就任する直前まで在任した。

直昭は本校創立と深い関係のあつた九鬼隆一の甥にあたり、東大

副手時代に岡倉天心の「泰東巧芸史」を聴講し、また、天心を訪問したりしていた。その頃のことを「美学者の散歩1 天心先生の講義」〔芸術新潮〕第十四卷第一号、昭和三十八年一月〕に書いているが、次の部分は彼が天心の影響を強く受けたことを示唆している。

これは私の二度目の「天心邸」訪問だったと思ふが、あるひは最初だったかもしれない。いづれにしても話の内容をおぼろげながら二、三記すと、これはやがて私の一生の研究の方向にも関することになるのだが、「日本美術の研究を本格的にやる気はないか」「数年のうちには国立の博物館ができるだらう、それができないやうではだめだ」「そのときには人材が必要だ」「日本美術を勉強するには半年くらゐ奈良に住まねばいかん」などと言はれたことを覚えてゐる。また私が雪舟画集の小さなものを持ってゐたのをお見せして、こんな研究はどうでせうと言ふと、それにはあまり触れず、「日本美術では絵巻物の研究がおもしろい。それには中川「忠順」といふ人がゐる」と、研究の対象や指導者まで示唆されたのであった。

直昭は深い学識、清廉潔白人柄、経歴に加えて右のような縁故を有し、本校指導者として十二分の条件を備えていたと言えよう。校長就任の経緯を詳しく記したものは残していないが、その著『邂逅』（昭和四十四年、岩波書店）には断片的ながら当時のことを次のように記している。

「十九年の春国宝保存会で上京すると、すんでから、文部省で東京美術学校の校長を引受けよといふ。横山大観先生の推せんもあつて、先生も乗気であり、膳立も大分整つてゐるらしい。田舎廻り二十年ののち、東京へかへつて何が出来ようとは思つたものの、準備は略出来てゐるし、一緒に仕事をして悔ゆることのない人々が揃ふ見込みがたつたので、引受けることにし、思ひもかけぬ職につくことになつた。十九年の六月のことで、戦争は已に峠を越えて、敵機が屢々東京の空を犯す。学生も次ぎ／＼に動員されて行く。私は朝に道をきく決心で暇さへあれば読みに読んだ。此頃時々ドイツ書を出して見ると其頃よんだことの記してある書が少くない。兎も角も戦争はすんだ。米軍の占領下に学制改革が行はれて、大学が沢山できた。東京美術学校は東京芸術大学の一学部となり、私は大学長に就任した。」

「私が始めて君「安井曾太郎」を知つたのは已に古いことになりましたが、君と親しく接するやうになつたのは、昭和十九年の春、私が東京美術学校の責任をとるやうになつた時からで、此時教官陣に若干の入換があり、私としては、是非安井君にも他の人々と一緒に、教授として助力して貰ひたいと思つたのですが、其頃はまだそれ程親しいわけではありませんでしたので、如何したものだらうかと考へた揚句、先づ共通の友人であつた、これも今は亡い児島喜久雄に相談に行くと、『それはむづかしいぜ、誰か偉い人に頼んで貰ふ外はないよ』といふのです。其処で私は、私が美術学校を引受けるについて、口火を切られた横山大観先生に、安井君の説得方を頼むと、快く引受けられ、自ら安井君を訪問

し、説得して下さったので、安井君も承諾し、爾来終戦後も引つづいて教授席を占めて、熱心に学生を指導されました。」

直昭は本校校長就任と同時に工芸技術講習所長兼任となり、帝室博物館顧問に選ばれ、二十一年八月帝国学士院会員、二十二年七月正倉院評議会会員、同年十二月国立博物館評議員、二十四年四月国立博物館長兼本校校長、同年五月東京芸術大学学長事務取扱、同年十月同大学学長専任となり、三十六年十二月まで在職した。著述は『上代の彫刻』（昭和十七年、朝日新聞社）、『日本美術史 上代篇』（同二十四年、河出書房）、『絵巻物研究』（同二十五年、岩波書店）、『明治文化史 8 美術篇』（同三十一年、洋々社）をはじめとして雑誌への寄稿も多く、枚挙に遑がない。